

地道な実践が「平和」を支える

上 廣 哲 治

新型コロナウイルスのパンデミックは、世界中を不安と恐怖に陥れた一方で、私たちがこれまで当たり前と思い込んでいた、いろいろな物事の大切さや価値に改めて気づかせてくれました。たとえば、人と人が向き合って話すことの大切さ、人が集まって楽しむことの素晴らしさ、移動に交通機関が利用できる有り難さ、私たちの暮らしがさまざまな人の支えで成り立っていることへの感謝の思いです。

なかでも家族の仕合わせについては、誰もが考えさせられたのではないのでしょうか。これまでは無意識のうちに、生活を支える仕事を優先して、家族と向き合うことを後回しにすることが当たり前になっていたのではないのでしょうか。

しかし、自宅で仕事をしてみると、家族の団らんと仕事が両立できることに気づいた人もたくさんいたでしょう。コロナ禍はマイナスばかりではなかったのです。これまでの生活をまったく新しい観点から見直すきっかけになったはずです。

今回の感染症では、多くの方が尊い生命を落としました。そしてその犠牲の上に、私たちは生きてあることの有り難さ、生命のかけがえのなさを再認識させられたのでした。

コロナ騒動の真つ只中でも新しい生命は誕生し続けました。この困難な状況下で初めて母になった女性が、いま悩んでいる人の支えになればと、自分の出産前後の十日間を手記にしてネットに公開し、話題を呼びました。

四月の緊急事態宣言下で臨月を迎えた彼女は、自分や生まれた赤ちゃんが感染する不安におびえ、夫とも極力離れて暮らしていたといいます。心肺停止状態で搬送された生後八か月の赤ちゃんから陽性反応が出たというニュースには強い衝撃を受けました。マスクやガーゼ、哺乳瓶に使う消毒薬や母乳パッドもドラッグストアの棚から消えました。それ以上に不足していたものは正確な情報でした。本来なら行われるはずの、新生児の世話の仕方を学んだり、出産の経験談を聞く母親教室も中止。家族の付き添いやお産の立ち会い、入院中の面会も禁止。後から物を持ち込めないというので入院用の荷物は膨れ上がりました。入院中は常にマスク着用で、同室の妊婦さんたちとの会話も皆無。院内のコンビニや授乳室の利用も制限されて、ほとんど一日中、カーテンで仕切られた病室のベッドの上で過ごしていました。すべてが想像以上に孤独で不安な十日間だったと彼女は言います。

それでも、ウイルスの感染防止に最大限の注意を払いながら、できるかぎりのことをしてくれた医療従事者には感謝の思いしかないと結んでいます。

この話を動かされたというのは、手記の存在を教えてくれた、幼い子どもを育てている若い一人親のお母さんでした。彼女に、この手記のどこに、なぜ共感したのかを聞いてみました。

つらい状況におかれると、人は不平不満の思いにかられ、それを他人や社会のせいにしがちです。一

方、お医者さんや看護師さんも、出産を控えた妊婦さんを孤独にたくはなかつたはずです。でも、感染を防ぐためには人に触れることを避け、適度な距離を保って支えるしかなかったのです。手記の著者は、そうしたかぎられた条件のなかでできることに全力を傾けてくれた医療従事者の誠意や努力をきちんと見極めて、感謝の気持ちを忘れなかった、そこに共感したというのです。

一人親として子育てをする若い母親は、時に周りから厳しい言葉を投げかけられるそうです。「親子の時間をもっと大切にしないさい」「子どもには手作りの料理を食べさせなさい」などと。言われることは文句のつけようのない正論です。批判する人は、正しいと信じているので、言葉に容赦がありません。もちろん若い母親も、そうしたとは考えています。「でも……」と言います。「いくら正しくても、一人親にはできないことがあるんです。できないなりに最善を尽くしているつもりです」と。

人間の力には限界がある。そのなかでできることに精一杯の努力を傾ける、そのことが尊いのだ。手記を書いた女性は、そう理解しました。そのうえで、孤独で不安な出産であったにもかかわらず、医療従事者への感謝の言葉を記したのです。それを讀んだ若いシングルマザーもそこに共感したのでした。

この話を聞いたとき、私は原爆が落とされた直後の広島で、傷ついた人々が生まれようとする小さな命をなんとか無事に生ませようと、心を一つにした話を思い出しました。

原子爆弾の落ちた二日後の八月八日のことです。深い傷を負った多くの人々が地下室に避難し、動くことができずに救いを待っていました。高熱にうなされる人、痛みを苦しむ人などが、狭くて暗い地下室にひしめき合っていたのです。

そこには臨月を迎えた一人の妊婦さんもいました。出産が近づいたのか、声を抑えて痛みを耐えています。「赤ん坊が生まれる」と、誰かが声を上げました。すると、重傷を負った一人の助産婦さんが現れたのです。

これは実際にあつた話です。それを伝え聞いた詩人の栗原貞子くりはらまことさんは、この出来事を力強い一編の詩に残しました。「生ませぬかな」という作品です。

「今、若い女が産気づいているのだ。／（略）／と、「私が産婆です。私が生ませましよう」／（略）／さつきまでうめいていた重傷者だ。／かくてくらがりの地獄の底で／新しい生命は生まれた。／かくてあかつきを待たず産婆は血まみれのまま死んだ。」

原爆によって多くの人が亡くなつていくなか、新しい命は希望そのものです。何としても無事に生ませなければならぬ。詩は激しい言葉でしめられます。

「生ませぬかな／生ませぬかな／己が命捨つとも」

同じ出産でもコロナ禍での出産と原爆被災直後の広島での出産とは様相が大きく異なります。しかし、底流にある考えはただ一つです。いま、自分たちにできることを精一杯実践するということです。完璧でなくてもいい。できることを一生懸命に実践することが大切なのです。

初代会長は、平和を保つことは、まず「家庭の平和から」（『希望と人生』「平和実践を願って」）実現していくことだと書いております。

肩ひじ張った大げさな実践ではなく、実情に即してできることをきちんと着実に行うことが、「我も人も仕合わせ」な社会をつくる近道なのではないでしょうか。今年の「平和祈念朝起会」では、そのことを誓い合つて、地道な実践に励もうではありませんか。